

4. アマルティア・センの貧困研究—ケイパビリティ概念について

飢饉へのアプローチにおいて、センはこれまでの厚生、効用によるアプローチに変わって、前述のエンタイトルメントによるアプローチを進めた。そしてこの後『人間の幸せ』を『所得』に規定される『厚生』によって測る事が<不適切>なのである」との主張にそって、「財」を用いて人がどのような状態や行動をとれるのかに注目する「エンタイトルメント」から、エンタイトルメントが産み出す「ケイパビリティ」¹へと関心を移してゆく。

⑤ 貧困へのケイパビリティ・アプローチ

i) 多軸的な指標によって貧困を測定する

「ケイパビリティ」とは、その人が、その社会で、将来において確かに達成可能な生活の豊かさであり、その社会の豊かさはケイパビリティの構成要素である、基本的ケイパビリティの集合として集計できるとする。

その欠乏である貧困は、人間の幸せな生活を構成する「諸機能 functionings」とされる「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」²などの少なさ、その動向で測る事ができるとの主張である。

※国連の貧困指標の開発：このような多面的に貧困を測るという考え方は、国連の人間開発計画指数（HDI）、人間貧困指数（HPI）に大きな影響を与え、その手法の吟味の中から「貧困とは多次元的な問題構造である」事は広く浸透していった。

1990年元パキスタン大蔵大臣、当時（UNDP: United Nations Development Programme）の総裁特別顧問であったマブール・ハック（1934-98）の発案によって『人間開発報告書』は創刊され、「人間中心の開発」という考え方を発表し、以後毎年各指数の動向が報告されている。1997年に提起された人間貧困指標（HPI: Human Poverty Index）は、人間開発指標（HDI Human Development Index）と同様に3分野（寿命、知識、人並みの生活水準）の指標選択と指数計算法を継承している。

http://www.undp.or.jp/publications/pdf/whats_hd200702.pdf

この指標は、貧困の測定に取り上げた3分野（寿命、知識、人並みの生活水準）の選択、また指標の統計上の取り扱いに対しても、その必然性に多くの疑問が呈されたが、センはこの指標の成功の後、2007年のUNDPの報告書において、人間開発指標（HDI Human

¹ 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』
P123 晃洋書房 2005年2月25日

² アマルティア・セン『不平等の再検討』P59 岩波書店 2000年12月

Development Index)の発案者ハックとの以下のようなやりとりを明かしている。

『荒削りでおおまかな指数』になぜそれほどこだわるのかと問うと、ハックはこう答える。『われわれが必要としているのは、GNPと同じ程度に俗っぽい尺度なんだ。たったひとつでいい。ただ、GNPほど人間生活の社会的側面に無理解でない尺度が必要だ…』と。後日、多くの人の関心をさらったHDIの成功に対しては、「ハックは、望みどおりのものを手に入れることができた」そして「彼に荒削りな尺度を追い求めるのをあきらめさせなくよかった。」とされている。

ii) 人間の境遇(障害、病弱、貧困な出自)からの不利益を考慮する

ところでその社会の望ましさを社会の全構成員の厚生(効用、満足度)から考えるのが厚生経済学である³。

旧厚生経済学の目的は、限られた財(稀少財)の最適配分、「社会的厚生最大化」を果たす配分を求める事とされる。社会全体としての厚生(社会的厚生)は社会を構成する個々の人の効用を足し算して測る事ができると考えて、有名なベンサム「最大多数の最大幸福」を追求した。

しかし個人の効用は「ひとびとがある経済メカニズムの帰結から受ける主観的満足(効用或いは厚生⁴)」なので、万人に共通な尺度はありえず、足し算する事は論理的に無理であるとの批判がなされた。

この批判を受け容れて効用の個人間の比較を否定した上で、個人はその内的な心理過程において、その胸の内において、効用に基づいて社会状態を比べる事、自分にとってどちらが好ましいかの判断、順序付け(序数的効用)はできるとされた。1930年代後半から構築されたのが、この序数的(順序付け)効用をベースにする新厚生経済学⁵である。

しかし順序付け(序数的効用)とは優劣という相対比較であって、その時比較された二つの間の効用の差、違いの量は不明なわけである。そうなるもたった一人が、全員とは異なる評価、判断をした場合には、その効用の差の量の特定ができない以上、その一人の判

³ 厚生主義(welfarism)は、一般の社会状態、特に分配の状態を、関係する人々の厚生によって、しかも厚生だけで判断しようとする考え方である。厚生(welfare)とは個人が自ら主観的に経験する感情あるいは意識の状態である。厚生と同じような用語としては福祉(well-being)や幸福(happiness)、欲求充足(desire fulfillment)、効用(utility)などである。

<http://www.nanzan-u.ac.jp/~mizutani/pdf/14%20redistribution%20of%20income.pdf>

⁴ 鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・セン 経済学と倫理学』P12 実教出版 2005年11月25日

⁵ 同上

断は無視できない。そこでその人も含めた全構成員の一致した判断を求める事となる。

またこの序数的効用を集計する社会的厚生関数は「自己利益最大化を合理的に判断できる」という同質な人々が前提であり、障碍、病弱、出自などの境遇の違いを考慮しない、同質、同価である。そのため社会判断として妥当であるためには、自由社会の誰でもが認めるルール、社会を構成するすべての人々、富者も貧者もその判断の重さ、社会構成員として等価として、尊重しなければならない。これが独裁者の非存在と言う理である。

この前提に立つ新厚生学的な判断基準、パレート効率性を追求すれば、一人の富裕層の効用を縮減し、極貧相の効用に切り分ける事さえもが否定される。その事から「所得や富の分配の衡平性など倫理的な側面」については「正面から議論する事を避けて効率至上主義と取られかねないアプローチしかできなかった⁶」とパレート原理の限界が指摘された。

「パレート最適性は、他の誰ひとりの状態も悪化させずに、誰かの状態を改善する変化を見つける余地が無い事を保障しているに過ぎない。富者と貧者の経済状態にどんなに隔たりがあっても、富者の豊穰を切り詰めずに貧者の分け前を高める事が出来なければ、その状態はパレート最適なのである。⁷」とセンは言う。

財の公正配分に対応できない序数的効用を基礎におくパレート原理、厚生主義的社会判断に対して、センは個人の置かれた境遇（障碍、貧困、病弱等）による社会的な制約を捕捉し、制約ある人（障碍、貧困、病弱等）にはそれを補償する為の財の配分、そのためのデータたり得る、個人間比較可能な概念としてのケイパビリティ概念が提示されている。

iii) 貧しさに慣れ切った人々の幸せと、富裕者の求める幸せを区別する

厚生や効用を「心理的満足感」、あるいは「願望の達成度合い」とするとしても、たとえば前者の場合には「心理的満足感」とは主観的なものである。その人の生活状況が長い間、低く継続している場合には、わずかの改善でも大きな満足感を産むであろう。また後者の場合の「願望の達成」についても、願望自体を低めにイメージするような心理的な防衛機制も働くであろう。

センは「長年に亘って困窮した状態におかれていると、その犠牲者はいつも嘆き続ける事はしなくなり、小さな慈悲に大きな喜びを見出す努力をし、自分の願望を控えめな（現実的な）レベルまで切り下げようとする。⁸」としている。

⁶ 鈴村興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン 経済学と倫理学』 P23 実教出版 2005年 11月 25日

⁷ アマルティア・セン著 鈴村興太郎・須賀晃一訳 「不平等の経済学」P10 東洋経済新報社 2000年 7月 27日

⁸ アマルティア・セン『不平等の再検討』P77 岩波書店 2000年 12月

そして「慢性的に剥奪されている者が望む事さえ許されていない潜在能力」を本人が主観的に「過小評価する⁹⁾」事もあり得るので、その回避ができるケイパビリティ・アプローチには、厚生による貧困へのアプローチに対する極めて大きな差があるとしている。

現下日本社会のような情報の偏りが大きい社会では、その方向でのマスコミの喧伝や操作も行われ得るところから、心理的な満足感、「効用、厚生」はいかようにも操作され得る量となる可能性を否定できないのではないだろうか。

人間の生存条件の窮乏を、心理的にではなく、事実として把握できるように、ケイパビリティの構成要素、豊かな生活を構成する諸機能 (functionings) は設定されている。

iv) 機能空間と財空間について

厚生経済学の領域の貧困研究では、貧困度を測定するための情報の性質、媒介とする変数 (所得など) の集合、いわばそのカテゴリーを「空間」と呼ぶ。伝統的な経済学が用いているのは「財 (所得) 空間」であり、センが新たに提示したのは「機能 (ファンクショニング) 空間」である。

後藤は両者を比較して「不平等や貧困・剥奪などの概念は《機能空間》上では絶対性を持つにもかかわらず、《所得空間》上では二重の意味で相対性—社会の様相に応じた相対性と、同一の社会内での相対性—を持ちえる事を明らかにしてくれる¹⁰⁾」としている。

また黒崎は「貧困は『基本的なケイパビリティ』 (basic capability) の『絶対的剥奪』として定義される [Sen1999d]」。この定義に基づけば、貧困は『ファンクショニング』と言う適切な物差しで測った場合には絶対的剥奪を意味するが、それを財・サービスという不適切な物差しで測った場合には絶対的剥奪に見えたり (カロリー摂取量など)、相対的剥奪にみえたりする ((衣服支出など) ことが明らかになったのである。[鈴木 1998]¹¹⁾」と説明する。

ケイパビリティの構成要素「機能」は、貧困の相対性を排除できる概念として、絶対的貧困、相対的剥奪 (貧困) を含む貧困全体を、絶対量として数量化する概念として定義されていると言う。

センの貧困研究は、国連の人間開発概念を主導するなど現代の貧困研究の地平を切り拓いたといわれている。

⁹⁾ 同上 P78

¹⁰⁾ 鈴木興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』 P207 実教出版
2005年11月25日

¹¹⁾ 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』
P91 晃洋書房 2005年2月25日